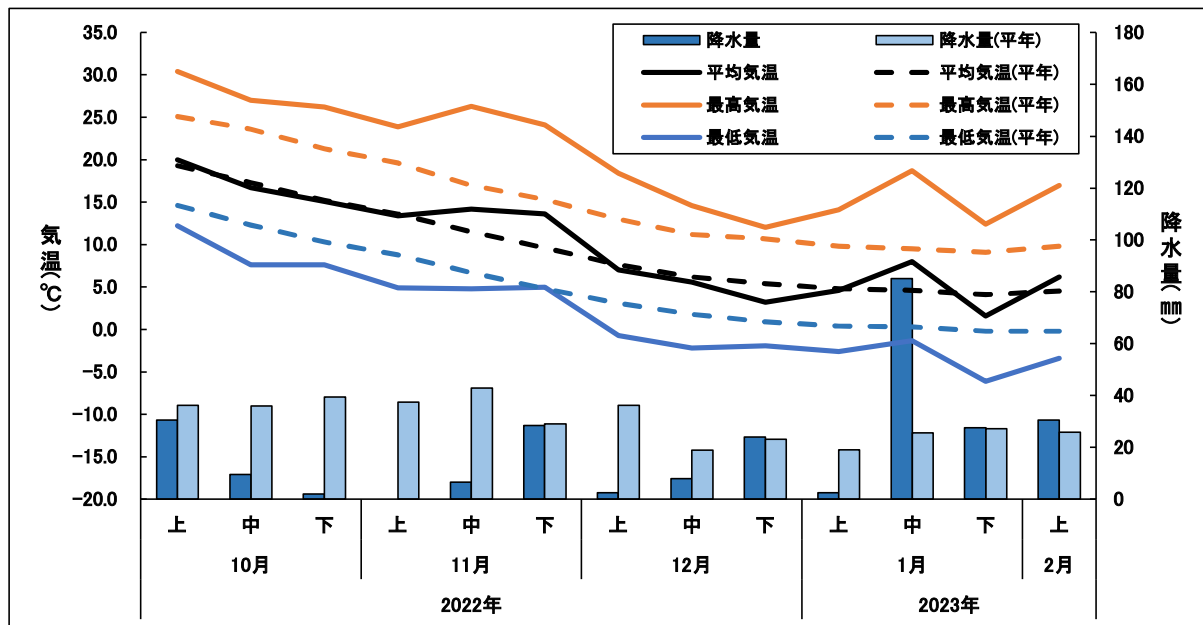


令和5年お茶づくり技術情報 (No.1)

2023年2月24日
佐賀県茶業技術協会
佐賀県茶業試験場

1. 気象と生育

1) これまでの気象 (2022年10月～2023年2月、嬉野市)



- (1) 平均気温は、平年と比較して11月中旬、11月下旬、1月中旬および2月上旬に高く、12月下旬および1月下旬に低く推移した。
- (2) 降水量は、平年と比較して10月中旬から11月中旬、12月上旬、12月中旬および1月上旬は平年より少なく、1月中旬に平年の3月以上の降雨があった。
- (4) 現在の越冬芽は、昨年同時期とほぼ同じ大きさである (写真1、2)。県内の早場地帯において、一部再萌芽園がみられる。



写真1 2022年2月14日の
さえみどりの越冬芽 (昨年)
(秋整枝10/15)



写真2 2023年2月16日の
さえみどりの越冬芽 (本年)
(秋整枝10/13)

2) 今後の気象の見通し

■ 1か月予報（気象庁、2023年2月9日発表）

向こう1か月の天候の見通し
九州北部地方（山口県含む）（02/11～03/10）

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
九州北部地方（山口県含む）	低30 並40 高30% ほぼ平年並の見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み

(1) 向こう1か月(2月11日～3月10日)の平均気温は、ほぼ平年並で、期間のはじめは暖かい空気に覆われやすいため高く、3～4週目は寒気の影響を受けやすいため、平年並か低くなる見込み。

(2) 向こう1か月の降水量と日照時間は、ほぼ平年並となる見込み。

2. 今後の管理

1) 土壌・肥料

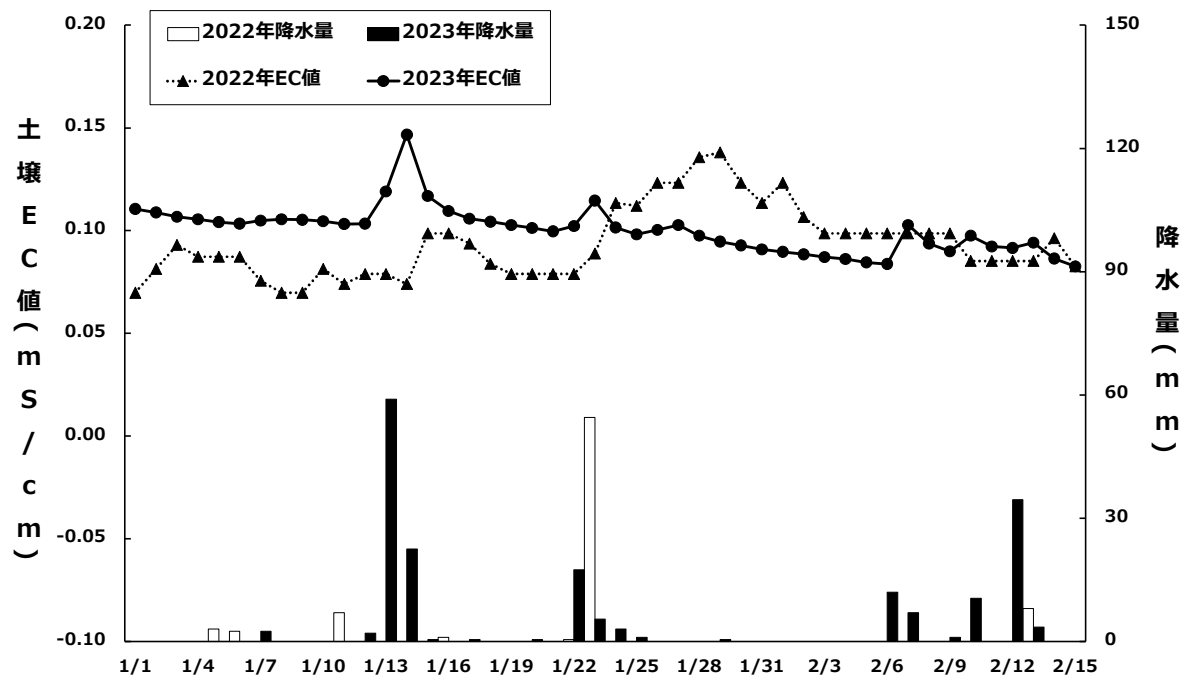


図 茶試作況調査園における土壌 EC 値の推移

注) 雨落ち部深さ 25cm 部分に埋設した土壌センサーにて測定し、実測値をもとに換算した値を示す

(1) 土壌 EC 値は、1月中旬に約 80mm の降雨と高温により上昇し、昨年より高く推移した。その後 1月下旬から 2月上旬は昨年より低かった。現在では、昨年と同等で推移している（上図）。

(2) 今後の気温上昇に伴い、地温も上昇し、茶樹による養分吸収が徐々に活発となり、また有機配合肥料は低温では分解に時間を要するため 3月上旬ごろまでには春肥を施用しておく。

(3) 施肥後は浅耕を行い、土壌と混和し溶脱を防ぐ。

2) 整枝（化粧ならし）

- (1) 3月上中旬を目安に、新芽が秋整枝面より上部に出る前に行う。
- (2) 新芽を傷つけないように、ハサミの高さは秋整枝面より深くしない。
作業が遅れ、秋整枝面より新芽が伸び上がった場合には、やや高めにハサミを入れ、新芽を傷つけないようにする。
- (3) 再萌芽した茶園の対応策
 - 再萌芽した芽が開葉している → 化粧ならしで除去する
 - 再萌芽した芽が開葉していない → 秋整枝面より5 mm 程度上げて、出芽した芽を切らない

3) 防霜対策

- (1) 防霜ファンは萌芽2週間前からの稼働を基本とし、早めに事前点検（温度センサー、首振り状態）を行う。
- (2) 防霜ファンの設定温度は茶株面で3℃（茶株面より樹体は2～3℃低い）を基本とし、過度に設定値を上げない（晩霜害の発生助長やランニングコスト高となる）。
- (3) 凍霜害の影響を受けた場合は、以下の対応策を参考に管理を行う。

生育ステージ	被害程度	対応策	
萌芽期～ 2葉開葉未満		被害の程度にかかわらず、そのままにしておく	
2葉開葉～ 4葉開葉	1)部分的で被害部と無被害部がはっきりしている場合	そのままにしておき、拾い摘み、または部分摘採を行う	
	2)部分的で被害部と無被害部がはっきりしない場合	①被害芽率が低い場合	そのままにしておく
		②被害芽率が高い場合	被害部を除く程度に軽く整枝する
	3)被害が全面的の場合	被害部を除く程度に軽く整枝する	
摘採期直前	1)被害が部分的の場合	拾い摘み、または部分摘採する	
	2)被害が全面的の場合	刈り捨てて二番茶の生育を待つ	

4) 病虫害対策

病虫害防除の詳細については、『令和 5 年度佐賀県施肥・病虫害防除・雑草防除のてびき』を参照してください。

URL : <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00388683/index.html>

